

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

論 文 題 目

論文審査担当者

主 査

## 別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

青年にとって自分の進路を考えることは、過去から現在の自分を見つめ直し、将来の自分を構築する作業でもある。進路選択は、「社会の中での自己実現、すなわち経済および精神的な自立を実現するために進路を選択、決定していくプロセス」と定義することができる。

本論文は、青年期における重要な発達の課題としての進路選択をめぐり、親のサポートの役割について検討すること目的としたものである。中学生・高校生・大学生と専門学校生を対象とした計4つの調査研究を含み、6章から構成されている。青年にとって親は重要なサポート源であり、幼い頃から日常生活で最も身近な職業人であることから、親サポートが青年の進路選択に与える影響は大きいと考えられる。進路選択と親のサポートの関連をとらえることにより、進路をめぐる問題を抱える青年とその親への相談や支援に役立つ示唆を得ることができるだろう。

論文全体の構成と概要は以下の通りである。

第1章では、先行研究を概観している。まず、各学校段階における進路に関する発達課題を整理した上で、進路選択をめぐる親のサポートに関する研究をまとめている。多くの研究では親のサポートと進路関連変数との間に好ましい関連が明らかにされており、特に海外ではサポートが自己効力を媒介として進路に関する行動や態度に影響することに着目した研究が多く見られた。国内の研究では親のサポートと青年の進路選択の関連を直接検討したものは少ないが、養育態度、愛着、コミュニケーション、働くモデル、職業継承行為といった視点からの研究がなされてきた。これらをふまえ、本論文の目的について論じた。

第2章では、青年が親から進路に関してどの程度サポートを得ているのか基礎的知見を得るために、中学生 382 名、高校生 135 名、大学生 129 名を対象とした調査を行った。Turner et al (2003) による Career-Related Parent Support Scale を邦訳して用いた。元の尺度は 4 因子から構成されていたが、新たに因子分析を行ったところ、各学校段階にほぼ共通して「気持ちの支え」（従来の情緒的サポートに相当）及び「親の職業経験に関する情報提供」の 2 因子が抽出された。学校段階による比較検討を行った結果、いずれのサポートも中学生と高校生の方が大学生よりも多く受けており、発達に伴い親サポートが減少することが示唆された。

## 別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

そこで第 3 章では、親からのサポートと進路選択関連変数との関連について、高校生を対象に調査を行い検討した。高校 1、2 年生 135 名に対し、Career-Related Parent Support Scale (Turner et al, 2003) の他に、進路選択自己効力尺度 (富永、2009) 及び進路選択行動尺度 (富永、2009) を実施した。その結果、励ましや期待を示す、気持ちを理解するなどの「期待・励まし」サポートは、進路選択に関する自己効力との間に正の関連が明らかにされたが、進路選択行動とは関連が示されなかった。また、親自身の職業について話すなどの「親の職業経験の情報提供」サポートは自己効力、行動のいずれとも明確な関連は見られず、総じて高校生年代における親からの情緒的サポートの重要性が示唆された。

続く第 4 章では、大学生の進路選択に焦点をあてた。大学生においては親サポートが減少するという 2 章の結果をふまえ、家族以外の友人、大学スタッフというサポート源を含め、サポート希求と進路選択への態度、精神的健康との関連を調査した。四年制大学 1～3 年生 235 名を対象として、進路選択に関するサポート希求 20 項目 (複数の先行研究を参考に作成)、キャリア・レディネス尺度 (坂柳、1996)、GHQ-12 (新納・森、2001) を実施した。その結果、大学スタッフのサポートは親や友人のサポートより分化してとらえられており、卒業後の進路に関心の高い者は、助言・情報などのサポートを、将来展望が低い者と精神的健康が低い者は、情緒的なサポートを大学のスタッフに求めている。親に求めるサポートは、進路選択への関心、計画性、及び精神的健康による差が認められず、大学生における親サポートは少ないが一定して存在している可能性が示された。

第 5 章では、日常生活の中でどのように親サポートや、職業をめぐる親子のやりとりが行われ、影響を与えているのかをプロセスとしてとらえるために、専門学校生 9 名を対象にインタビュー調査を行った。半構造化面接で、特定の職業を希望した時期、理由、職業に関する親の会話等について尋ね、得られたデータを KJ 法にて分類整理し、複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model : TEM) を用いて (サトウ他、2006)、現希望職の決定に至るまでの出来事、経験を検討した。その結果、親が特定の職業を紹介したり勧めたりするといった意図的、積極的な関わりは少なく、親の職業についての日常生活の中での自然な会話や、青年の決定を信頼したり任せるといった自主性を尊重する態度が重要であることが明らかになった。

## 別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

第 6 章では、総合考察として、第 2 章から第 5 章までの調査の結果を踏まえ、青年にとって進路選択という課題に対する親からのサポートやかかわりがどのように重要であるのかについて論じた。親が意図的に期待や励ましを伝えるような情緒的なサポートは大学生年代になると減少するが、幼少期から日常生活の中で自然に経験してきた親との職業に関する会話や、職業人としての親の姿などから得られた情報が、青年期における自律的な進路選択の土壌となり、自主性を尊重する親の態度が青年の進路選択に促進的な影響を及ぼしていると考えられた。さらなる課題として、父親と母親とでは異なる役割モデルとなる可能性、親や家庭のサポート機能が十分でない場合についての支援について提起された。

以上の論文内容について審査委員会は慎重に審議を行い、次のような問題点の指摘や助言がなされた。①Turnerらによる親サポートの尺度について、文化差を考慮して項目の検討が必要である、②進路選択、進路成熟、キャリア発達等の類似概念について、意識して使い分ける必要がある、③親への示唆・提言が明確ではなく、親サポートのメカニズムにもっと深く切り込む必要がある。

これらは申請者においても十分認識されており、今後研究を継続する中で、さらに深めていく予定である旨の説明がなされた。以上の点を含め本論文は、先行文献や理論的背景についての丁寧なレビューをふまえて、進路選択という青年期の重要な発達課題について親サポートとの関連から検討し、一定の知見を得た点で評価され、学術的意義があると判断された。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。